

【講演会報告】

楽器と音楽のルーツを探る～鹿笛と法螺貝を中心に 柘谷隆男氏講演会

(2007年度第2回講演会 日本文化人類学会北海道地区研究懇談会・北海道民族学会 共催)

荏原小百合

開催日：2007年12月16日

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室

講師：柘谷隆男氏（北海道札幌拓北高等学校 教諭）

柘谷氏の専門は音楽学、楽器学、音楽教育学、比較芸術学を中心とした狩猟と音楽の関係であり、これまで日本全国をフィールドワークしてきた。鹿笛研究の第一人者である。鹿笛などの音具収集数百点、鹿笛文献収集 1800 点、鹿笛に関する発表（執筆、講演、講座等）は 160 件を超える。当日は小さなものも含めると 100 点ほどの楽器（音具）が展示され、実演も含めた講演であった。

鹿笛研究の経緯

前任校である札幌篠路高校に赴任後、職場で菅江真澄の研究者に出会い、その同人誌『かたいたの袋』に寄稿したいと考えるに至った。その頃同時に、道の無い山中をバイクで走るトライアルを行っている時、いつも鹿を見かけた。エゾ鹿の雄志を目にし、鹿の話を書こうと考え、最初に北海道と鹿、特にアイヌと鹿について調べるうちに故萱野茂氏の本に出会い、鹿笛を知り、鹿と人について調べ始める。

また笛類の分野に関心を抱いたきっかけは、20 数年前に出合った S.N.ピコフ著『マンモスの骨で作った楽器』（ソシノート付き）だ。この本と鹿笛が結びつき関心が広がった。

鹿笛

鹿笛の一番古いものは 4200 年前の縄文後期の貝塚から出土している。また、2006 年には、弥生の遺跡から鹿笛が出土したニュースに触れ、音楽考古学に惹かれてゆく。鹿笛は音楽や楽器のルーツではないか？という仮説が導き出されてくる。

鹿は 10 月のなかば頃繁殖期に入りテリトリーを持つ。1 頭のオスは 20 頭程度のメスを囲い込む。メスは 24 時間だけ発情する。オスの強さの象徴は、一息が長いことだ。そしてこの鳴き声によって、ライバルが来たかと思えば他のオスが飛んでくる。最近北海道で発見されたが、穴を掘っておき、この笛を吹いて鹿をおびき寄せ、落とす。現代では、おびき寄せて銃で撃つ。鹿の低音から高音までの変化を含むグリッサンド的な鳴き声は強さの象徴である。

音楽起源論

現在柘谷氏は、楽器に関して、自然模倣説をとる。語尾上げ、言語の抑揚から音楽が生まれたとする説がある。人は一般に気持ちが高揚すると声が高くなり、気持ちが沈むと声が低くなる。このような音程の違いは様々な意味がある。信号合図説は法螺貝の説明を通じて述べる。

法螺貝

法螺貝はヒンズー教からきており、法螺貝の音はお釈迦様の説法である。山伏が説法していたが、時代を経るとともに山伏が段々いい加減なことを始め、「ほらを吹く」という言い方が生まれた。日本に入ってきた経緯は、806 年頃から空海や最澄らの、いわゆる密教系の人たちが唐から帰国した際、8 人位のうち 5 人が法螺貝を持ち帰ったことに始まるが、その行方はわ

からない。真言を唱え、法螺貝を吹くが、この音自体がお釈迦様の説法でありがたいものだと考えられる。法螺貝を吹くと法螺貝自体が、神のよりしろ、音のよりしろとなる。一般に高い神御は柳や竹を突き刺し神が来るように立てるが、音楽そのものが神のよりしろ神御であり、神を帰すために再び吹く。演奏法はモールス信号のように、リズムと音を組み合わせれば非常に多くの情報を伝えることができる。

質疑応答

【質問】：鹿笛には吸って吹くタイプのものもあるか？

【回答】：リードが樹脂のタイプでロシアの沿海州にいるウデヘにある。ユーラシアから北米に多く分布。その他木をくりぬいたタイプでエベンキヤやモンゴルのツァータンなどにもある。

【質問】：なぜ人が楽器や音で自然を模倣するのか？

【回答】：狩猟との関係で、動物をとる前に狩猟民族は必ず精霊に許しを請う祈りをする。その際精霊を呼ぶよびしろとして、その動物の鳴き声を出しただろうという仮説がある。様々な民俗芸能にその痕跡をみることができる。狩猟の場面や儀式の中から音楽が生まれてきたと考えられ、時には猟の合間に手慰みに吹いていたところから音楽が生まれ、それが一つの楽しみになったとも考えられる。狩猟の弓が弦楽器になってゆき、狩猟の獲物が太鼓になってゆく。一連のものを関連付けて自然を模倣することが人間の命をつなぐことであり、音楽は命をつなぐものとして、とても大事なものである。

【質問】：鹿笛の材料、出す音のバリエーションについて

【回答】：木、鹿角、鯨の骨、焼き物と思われるものがある（本体の材質は音色に影響はほとんどなく、大事なものはリードとして張るもの）。張るのは、アイヌの場合は、鹿の膀胱が多く、アメマス、鮭、カスベなど魚系も多い。本州ではネズミ、リス、猫、鹿の胎児、鹿の耳の内側の皮など動物性のものがよく使われている。アイヌのものは鹿の角製のものが2点あり、あとは木製。一つの仮説として、鹿の身体の一部を使っているものが多いのは何か呪術的な意味があるかもしれない。吹き方の例は、オス笛、メス笛、子笛がある。それぞれの鳴き声で呼ぶ。鹿の鳴き声には警戒音、地鳴きなど10～16種類もあると言われる。

【質問】：鹿の種類が違えば笛も違うのか

【回答】：本州の鹿は個体が小さいのでリードの調節をして高い音が出るようにし、エゾ鹿は個体が大きいので低い音が出るようにする。大陸の鹿マールーやハンダハン等は大きいのでメガホン型の大きな鹿笛を使用、アメリカには鹿笛の会社が120位ある。



柘谷隆男氏

まとめ

鹿笛を中心に笛類を研究する柘谷氏は、鹿笛を楽器の起源と捉える一つの仮説を継続しながら、現代の人と楽器の関わり、楽器の伝播についての強い関心を通じて、人が音楽を始めた起源を問い続けている。そのことを学生とともに思考する姿は、音楽学や音楽教育学に新しい研究の有り様を常に提示し続けている。一度、専門である鹿笛のみに特化した講演に触れてみたい。

(えはら・さゆり／北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)